

基礎心理学と臨床心理学の協調 — 妄想的観念の認知行動モデルを例に —

丹野義彦

東京大学 大学院 総合文化研究科

The clinical psychologists in western countries cooperated with the researchers of psychonomic science with the development of cognitive behavioral therapies, evidence-based practice and large umbrella organization of psychological association. The benefits of cooperation between clinical psychology and psychonomic science in Japan are discussed, taking an example of the study of delusional thought. Recent studies reported that normal people have delusional thoughts. The three types of reasoning style are considered to be involved in the development of delusional thoughts; 1) Self-defensive attributional style, 2) Self-as-target bias and 3) Jumping to conclusion bias. The establishment of abnormal psychology in Japan is proposed, which will interface clinical psychology practice with academic psychology.

Key words: clinical psychology, delusional thought, attributional style, self-as-target bias, jumping to conclusion bias.

臨床心理学と基礎心理学の協調

欧米の臨床心理学においては、①精神分析から認知行動療法へ、②エビデンスにもとづく実践 (Evidence-Based Practice) の定着、③心理学会のアンプレラ団体化という3つの大きな動きがある (丹野, 2010)。この根底にあるのは、「基礎的心理学に裏づけられた臨床心理学の確立」ということである。欧米の臨床心理学者と基礎的心理学者は協調を強めているが、なぜかという点、お互いに得になるからである。臨床心理学者にとっては、臨床行為の科学的基盤が保証されれば、社会的な信用を得やすいし、心理学会としてまとまっていれば、資格を統一的に管理することができる。一方、基礎的心理学者にとって、基礎研究の成果が臨床に応用されれば、基礎研究の社会貢献をわかりやすく説明できる。これにより社会から研究資金を獲得しやすくなる。このような共存共栄によって、心理学者の社会的ステータスは高く維持されている。残念ながら、わが国の臨床心理学者と基礎的心理学者の交流は稀薄である。わが国の心理学者はお互いに損をしているわけである。両者が連携するとお互いに徳であることを大いに訴えたい。

臨床心理学と基礎的心理学の交流の一例として、統合失調症のアナログ研究、とくに妄想についての研究を紹介したい。統合失調症とは、妄想や幻覚など様々な症状を含む症候群であり、生涯罹患率は約1%である。原因は遺伝子を含んだ器質的な背景が仮定されているが未だ明確ではない。これまでは、妄想などの統合失調症の症状は健常者には見られない異質な体験であるとされてきた。しかし、近年では、両者の間に連続性を仮定し、健常者の中での病理傾向 (個人差) を検討することで統合失調症の病理解明をめざすアナログ研究がおこなわれている。

妄想的観念の主題を構造的にみる

妄想は精神病に多くみられる症状であるが、健常な人でも妄想と似たような体験をすることがある。Peters, Day, McKenna & Orbach(1999)は、ピーターズ妄想質問紙を用いて、妄想を持つ精神疾患患者と一般成人を比べた。その結果、体験した妄想の項目数には差がなかった。差があったのは、苦痛度 (それによってどのくらい苦痛を感じているか) や、心的占有度 (どれくらい妄想的観念について考えてしまうか) であった。つまり、健常者の多くが妄想的観念を経験しているが、健常者は、精神疾患患者のように、妄想によって苦痛を感じたり、心を占有されてしまうことがない。ピーターズ妄想質問紙を用いた研究は世界の多くの国で行われ、同じような結果が得られている。

丹野・石垣・杉浦(2000)は、妄想の主題を整理するため、妄想観念チェックリストという質問紙を作った。これは、いろいろな診断基準や面接基準などから、妄想の主題を集め、因子分析をおこなって作成したものである。これを用いて、妄想を持つ統合失調症の患者と一般の大学生の妄想的観念の体験頻度を調べた。この質問紙には8つの下位尺度があるが、被害観念、庇護観念、加害観念、他者操作観念という4つの下位尺度において、統合失調症群の体験頻度は、大学生群より有意に高かった。

また、一般の大学生の体験率を調べた。体験率とは、各下位尺度の1項目でも「体験がある」と答えた学生の比率である。これによると、庇護観念は41%と低い、被害観念は75%、加害観念は94%、他者操作観念は83%と、全般に高い値を示した。このように被害観念や加害観念は、一般の大学生の多くが体験している。

妄想的推論の心理学的研究

妄想や妄想様観念を発生させる心理学的推論の特徴として、①投影的帰属バイアス、②自己標的バイアス、③性急な結論バイアスなどが知られている。

第1の「投影的帰属バイアス」とは、もともとフロイトの投影説からきている。投影とは、本当は自分の中にある感情や欲求なのに、それを外界の対象のせいにしてしまうことである。例えば、自分が攻撃的な感情を持っている時に、それを自分では認めたくないの、他の人に投影して、他人が自分を攻撃しようとしていると考えるようなことである。投影のメカニズムについて、抑うつと妄想とを対比的に考えられている。つまり、抑うつ者も妄想者も劣等感が強く自信がない。それを「自分の責任だ」と考える（内的帰属）と、抑うつ症状となる。これに対し、「他人の責任だ」と投影（外的帰属）すると妄想症状となる。以上のような臨床観察を支持する心理学研究の結果もある。

第2の「自己標的バイアス」とは、自分を他者からの標的として認知しやすい傾向のことを示す。人前を通りかかったらその人たちが笑ったような場合、自分が笑われているのではないかと考えたりすることがある。これが自己標的バイアスである。「自己標的バイアス質問紙」では、仮想的状況の中での自己標的バイアスを調べる。例えば、「あなたが廊下を歩いていると、知り合いの人があいさつもせずに通り過ぎて行く」という場面を想像させた。これについて、「①その人は、あなたと話したくなかったから通り過ぎた」という文と、「②その人は、別のことに気をとられていてあなたに気がつかなかったので通り過ぎた」という文の2つを示して、それぞれ「非常にそう思う」から「全くそう思わない」まで評定させた。この場合、①が自己標的反応であり、②が非自己標的反応である。大学生を対象とした著者らの調査では、自己標的バイアスが高い人は、妄想的思考が強かった。

第3の「性急な結論バイアス」とは、少ない情報から強い確信に至ってしまうという判断傾向のことである。Garety & Hemsley(1994)は、ベイズ統計学にもとづく信念形成モデルを枠組みとし、そこからの逸脱として妄想を説明し、それを実験的に確かめた。彼らは、妄想を持つ統合失調症の患者と健常対照者を対象として、確率推定課題をおこなった。この課題は、2つの集合の中からサンプルを抽出して、どちらの集合に属するかを推測させるものである。この実験の結果、妄想群は、結論にいたるまでのサンプル抽出数が少なく、最初にたてる仮説の確信度が高かった。つまり、妄想

群は、少ない情報量から性急に結論を引き出す傾向を持ち、こうした結論への性急な飛躍バイアス (Jumping to conclusion bias) が妄想の基礎になる。

興味深いことは、この結果をベイズ統計学からみると、妄想群のほうが「合理的」な判断をしていることである。健常対照群のほうが、むしろ非合理的である。慎重で保守的すぎる判断をしていることになる。ベイズ統計学からいうと、むしろ健常者に慎重な判断バイアスがあり、妄想群にはそうした慎重なバイアスがないというのである。

臨床と基礎への応用

このような研究をもとにして、妄想に対する認知行動療法がおこなわれ、症状を改善する効果があることが確かめられた(Fowler, Garety & Kuipers, 1995)。統合失調症の患者を対象として、認知行動療法群と対照群（標準的治療群）にランダムに割り付けた結果、精神医学的症状を調べると、9ヶ月後の治療の終了時には、認知行動療法群で症状の改善がみられた。この症状改善の効果は、治療をやめた9ヶ月後にも続いていた。

基礎的心理学では、個人差をノイズとして考えることが多いが、その個人差がどこから来ているのか少し考えてみると、新たな研究の視点が開かれかもしれない。

引用文献

- Fowler, D., Garety, P. & Kuipers, E. 1995 Cognitive Behaviour Therapy for Psychosis. Wiley (石垣琢磨・丹野義彦監訳 2011 統合失調症を理解し支援するための認知行動療法, 金剛出版)
- Garety, P. & Hemsley, D. 1994 Delusions: Investigations into the Psychology of Delusional Reasoning. Oxford University Press.
- Peters, E., Day, S., McKenna, J. & Orbach, G. 1999 Delusional ideation in religious and psychotic populations. *British Journal of Clinical Psychology*, 38, 83-96.
- 丹野義彦 2010 心理学で進む三つのパラダイムシフト. 坂本真士・杉山崇・伊藤絵美 (編) 臨床に活かす基礎心理学. 東京大学出版会. pp.30-32.
- 丹野義彦・石垣琢磨・杉浦義典 2000 妄想的観念の主題を測定する尺度の作成. 心理学研究. 71. 379-386.